ISSN 2432-2849

名古屋大学国際機構

国際言語センター

年　報

第5号

目 次

巻頭言……大室　剛志　1

実践報告

・平成29年度公開講座「日本語学習支援を始めよう !! 日本語パートナー講座」……衣川　隆生　5

活動報告

・FD 活動の報告 ……俵山　雄司　9
・第76・77期（2017年度）日本語研修コース ……衣川　隆生　11
・第36期　上級日本語特別コース（2016年10月～2017年9月）……永澤　　済　13
・全学向日本語プログラム　2017年度 ……李　　澤熊　16
・学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」 ……浮葉　正親　21
・短期留学生日本語プログラム　2017年度 ……石﨑　俊子　25
・第18期　日韓理工系学部予備教育コース ……俵山　雄司　28
・オンライン日本語コースの運営 ……石﨑俊子・佐藤弘毅　30

資料 …… 31

巻頭言

「ある変化」

国際言語センター長

大　室　剛　志

2017年４月１日に国際言語センター長に就任し，本年度で２年目を迎える大室剛志と申します。昨年度同様，本年度も宜しくお願い申し上げます。

私達の国際言語センターは，現在，日本語・日本文化教育部門と英語教育部門の２つの部門から成っています。日本語・日本文化教育部門の主たるミッションは，外国人留学生への日本語教育・日本文化理解教育を提供するとともに，日本語教育のための教材開発，教育法の開発研究を行うことと，インターネットや各種メディアを用いた日本語教育用コンピュータ・ソフトウエアの研究開発・提供を行うことです。基本的には，この点は以前と変わりありません。

しかしながら，国立大学法人に与えられる運営費交付金は毎年削減されてきており，それに順じて国際言語センターの親母体である名古屋大学国際機構の予算も例年削減されています。他方，名古屋大学外国人留学生は，2017年５月には，106カ国から合計1,805名だったが，2018年５月には，109カ国1,981名とこのわずか１年の間でも，３カ国増え，人数としては176名増し，9.75％増となっています。2018年の外国人留学生を地域別で見てみると，アジア1,625名（82％）と圧倒的に多く，欧州136名(6.9％)，アフリカ70名(3.5％)，中南米48名（2.4％），北米42名（2.1％）中東42名（2.1％），太平洋18名（0.9％）となっています。出身国トップ10を見ると，中国945名，韓国159名，ベトナム90名，インドネシア83名，タイ45名，台湾43名，モンゴル41名，マレーシア38名，アメリカ33名，カンボジア33名，インド29名です。これら留学生は，学部生であるか，院生であるか，国費か外国政府派遣か私費であるか，経歴の点，現在のステイタス，宗教の点など実に様々です。このようにグローバル化が進む現在，ますます留学生の数とその多様性は今後も増え続けるに違いありません。これは私達国際言語センターにとっては，上で述べたその主たるミッションからしても，嬉しいことではあります。しかし，また一方で，予算が減少していることを考えると，苦しい中でなんとかやりくりをしながら，その職務を果たしていくことが，今後，更に厳しく求められることになります。その点で，国際機構のもう１つの組織である国際教育交流センターとも今迄以上に緊密に連携していくことが必要になって来ます。

昨年度，2017年度に文学研究科と国際言語研究科と国際開発研究科国際コミュニケーション専攻が合体して大学院人文学研究科が新たに誕生しました。発足してから，ありがたいことに順調に一年経過しました。この人文学研究科の応用日本語学専門を国際言語センターの先生が占めておられます。このことは，上で述べた従来のミッションに，次のミッションが明示的に(もちろん，これまでもなされて来たわけですが)加えられることを意味します。(1) 大学院人文学研究科応用日本語学分野における科目の担当 (2) 大学院人文学研究科応用日本語学分野における修士学位論文・博士論文の指導（3）上記（1）（2）に寄与する応用日本語学分野の研究 。

当然のことではありますが，多様な留学生に日本語・日本文化を教育するにあたっては，国際言語センターの先生は，日頃研究に邁進し，その研究成果を留学生に還元しようと常に努力することが求められることになります。研究力と教育力の両方が当然ながら重要です。

なお，英語教育部門は，G30との兼任教員で構成されていますので，特にこの年報には記述がないことをお断りしておきます。

実践報告

平成29年度公開講座

「日本語学習支援を始めよう !! 日本語パートナー講座」

衣　川　隆　生

１．はじめに

国際言語センターでは，日本語学習支援ボランティア組織「さくらの会」との共催で平成25年度から公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」を開催してきた。「さくらの会」は，旧留学生センター教員が講師を担当した名古屋市生涯学習センター主催2003年度日本語ボランティア入門講座修了生を中心として2004年４月から活動を継続している日本語学習支援ボランティア組織であり，「日本語で話そう」を合い言葉に現在国際言語センターを中心として週２回活動を行っている。

平成28年度に引き続き，平成29年度においても日本語学習支援の対象者を留学生に限定せず，地域に在住，在勤の外国人を対象とした日本語学習支援を取り上げ，「日本語学習支援を始めよう !! 日本語パートナー講座」という題目で，公開講座を開講した。

２．講座の概要

講座は11月１日，８日，22日，29日の水曜日に４回実施された。時間は，14時45分から16時15分までの90分である。以下，概要を紹介する。

第１回「大学と地域の国際化」

１）「留学生30万人計画」「グローバル30」「スーパーグローバル大学創成支援」など，現在推進されている文部科学省が進めている日本の大学の国際化施策について

２）名古屋大学の国際化プラン，留学生数やその割合，出身地域などの現状について

３）留学生に求められる日本語とは
「生活者として求められる日本語」「キャンパス日本語」「学術日本語」の分類と内容

４）愛知県の外国人県民の現状･「あいち多文化共生推進プラン2013 - 2017」･「愛知県 多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方」について

５）豊田市の外国人市民の現状，多文化共生施策，日本語学習支援について

第２回「日本語学習の支援ってどんなこと？」

１）「お気に入りの場所 （うち・お店・公園・職場など） を紹介する」という対話活動の体験

２）体験活動のふりかえり

第３回「対話と協働を中心とした学習支援の方法」

１）狭義の日本語教育と広義の日本語教育の差について

２）対話と協働とは？

３）新たな学習観について

第４回「具体的な活動を知ろう」
対話型の活動の原則＝ここに気をつけよう

３．受講者の状況とアンケート結果

コミュニティセンターなどにおけるチラシ配布，新聞広告を利用して受講者の募集を行ったところ20名から申し込みがあった。その後２名受講キャンセルが出たため，最終的には18名の受講者で講座を開始した。何らかの形で外国人に対するボランティア活動をしている方も多かったが，ボランティア自体が初めてという参加者も３人に１人の割合であった。18名中15名が４回全てに出席し，２名が３回出席，１名が２回出席であった。また，終了時には17名からアンケートを回収することができた。以下，アンケートの結果を検討する。

まずこの講座についてどこで知ったかについては「新聞広告」が10名で最も多く，次いで「チラシ」が４名，「友人から」が３名であった。新聞広告を利用して

広報活動を行っているが，その効果は非常に高いことがわかる。

「受講の目的，期待」については，以前から「外国人・留学生との交流」「ボランティア」に興味があったからそのきっかけ作りに，という回答が多かった。一方，すでにボランティア活動を行っている方からは「教科書を使った教え方に疑問を感じていたのでそれとは異なる方法を知りたかった」「スキルアップを図りたい」など現在の活動を振り返るという目的を持った方も多かった。次に「講座の内容が目的，期待に合ったものであったか」という質問に対しては，ほとんどの人から「期待通りであり，今後自分の実践に役立てたい」という肯定的な回答が得られたが，中には「もう少し具体的なノウハウを体験する時間があればよかった」という回答もあった。４回の講義では，具体的なノウハウまで掘り下げることが難しく，活動を行う際の「心構え」「意識すること」に焦点をしぼっていたための反応であると考えられる。これらの声に続けて「継続的に」「回数を増やしてほしい」という声も多く寄せられた。来年度以降も，これらの点にも考慮しながら講座のあり方を検討していきたい。

ー平成29年度国際言語センター公開講座ー

日本語学習支援を始めよう!!

日本語パートナー講座

ボランティアとして何かをしたいと思っている方、
日本語パートナーについて学んでみませんか。

＊講座内容と日程

	日　程	内　　容
第1回	11月　1日（水）	大学と地域の国際化
第2回	11月　8日（水）	日本語学習の支援ってどんなこと？
第3回	11月22日（水）	対話と協働を中心とした学習支援の方法
第4回	11月29日（水）	具体的な活動を知ろう

時間　14時45分　～　16時15分

場所　名古屋大学　教室未定

講師　名古屋大学国際機構国際言語センター
教授　衣川　隆生

＊昨年と同じ内容ですので、継続の方はご遠慮下さい。

＊この講座は、名古屋大学国際機構国際言語センターとさくらの会の共催で行われます。
さくらの会は 2004 年より名古屋大学の留学生とその家族の日本語学習を支援しています。
日本語パートナーとして、「教える」という言葉にとらわれず、テキストは使わないけれど
学習者の知っている「ことば」から「対話」へと広げていく、『日本語で話そう』を合言葉に
ボランティア活動をしています。
＊会員募集を前提としたものではありません。公開講座です。

活動報告

FD 活動の報告

第76期・第77期（2017年度）日本語研修コース

第36期　上級日本語特別コース（2016年10月～2017年9月）

全学向け日本語プログラム　2017年度

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

短期留学生日本語プログラム　2017年度

第18期　日韓共同理工系学部留学生予備教育コース

オンライン日本語コースの運営

FD 活動の報告

俵　山　雄　司

日本語・日本文化教育部門では，平成14年に FD 班を設け，以後，現在に至るまで，日本語･入門講義の授業を担当する教員全員で FD 活動に取り組んできた。さらに平成16年には，留学生センターの委員会として FD 委員会を設置し，教員個々の教授能力の向上，授業の改善を目指している。

今年度は，平成27年度に新たに策定した「平成28年度から32年度までの FD 活動計画」の最初の年度にあたる。以下にその概要を示す。

平成28年度から32年度までの FD 活動計画

「成功例・要改善例の共有による教育改善」

①報告の執筆と共有

・年度ごとに，教員個人が１つの授業を取り上げ，そこで行った試みの成功事例（あるいは要改善となった事例）の報告を執筆する。報告は FD 担当者がとりまとめ冊子にして全員に配布。

②口頭による報告とディスカッション

・年度ごとに担当者が報告を２つ選び，それについて，授業者に発表してもらいディスカッションの機会を設ける。

上記のサイクルは，平成29（2017）年度末に①の報告を執筆するところから開始となった。今回の報告のタイトルを，報告対象となったコース別に示す。

日本語研修コース（EJ）

電子黒板を用いた初級会話（Dialogue）授業，グループワークによるディクテーション自己チェックの試み，EJ における多読の実践とその改善

日本語・日本文化研修コース（AJ）

上級レベルにおける作文教育の実践報告―関心や能力をどう引き出すか―，「話すテスト」のチェックシート，AJ コース「本の読解」における試み，連語の指導

全学向け日本語コース（IJ・SJ）

IJ111におけるオノマトペ導入の試み，初級レベルにおけるオノマトペ導入，IJ111における Quizlet を利用した漢字学習の試み，IJ212初中級レベルでの読解授業の試み，自己紹介文：ブレインストーミングの導入による内容の重層化，IJ211会話クラスにおける学習者の記録とふり返り，IJ212読解のルーブリック，SJ101におけるシャドーイング導入，SJ201会話授業での試み，SJ202聴解科目における生教材使用の試み，「SJ200b 聴解」―上級クラスにおける生教材の使用について，SJ300におけるルーブリック導入による自己評価，SJ301作文Ⅰにおけるインタビュー報告の執筆，SJ301聴解におけるピア･ラーニングの試み，「SJ301読解」における討論及び「楽読」の試み，「漢字アラカルト1000」クラスにおける試み

学部留学生を対象とする言語文化科目

学部１年生の口頭表現クラスにおけるプレゼンテーション活動の改善

入門講義

入門講義「日本語学」―演習形式授業の試み―，入門講義「日本文化論１」新教材導入の試み

その他

プレースメントテストの有効性について

次に，②の口頭による報告とディスカッションであるが，本来は①の報告から２つを選んで行うものである。しかし，①の報告の提出が年度末であったため，それ以前に，FD 担当者からの依頼（１件は自身が担当）で話題提供者を決定し，２回の FD 研修会として実施した。詳細を以下に示す。

(1)

日時：10月17日（火）午後３時～４時

場所：国際言語センター308教室
話題提供者：俵山雄司
タイトル：ルーブリック評価とその運用
内容：次年度からの新カリキュラムで，評価ツールとして使用が予定されているルーブリックについて概略を説明した。また，クラス（SJ300語彙会話）での使用例を実例とともに紹介した。

(2)
日時：12月12日（火）午後３時～４時
場所：国際言語センター308教室
話題提供者：椿由紀子
タイトル：小説を読むアクティブラーニング
内容：IJ212の読解の授業で行った，村上春樹の『蛍』を読ませ，そこから評論の執筆につなげる実践を紹介した。また，その評論の評価に用いるルーブリックについても，使用例を示した。

この研修会には，国際言語センターの専任教員及び非常勤講師の大半が出席し，活発な質疑応答や議論が行われた。

第76期・第77期（2017年度）日本語研修コース

衣　川　隆　生

１．研修生

第76期日本語研修コースの受講生はすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり，合計27名であった。その内訳は人文社会学系を専攻する学生が15名，理工系を専攻する学生が12名で，そのうち25名が名古屋大学に，１名が滋賀大学に，１名が南山大学に進学予定であった。その出身国は22ヶ国であった。第76期より，受講生の来日前に日本語研修コース修了後に指導予定の教員と連絡を密にとり，大学院入学試験の時期やその準備に必要な時間数，ゼミ出席の頻度などを聞き取り，その結果を参考にして，１日３コマ，週15コマの初級特別日本語コースを受講するか，１日１～２コマ，週５～10コマの全学向けコースを受講するかを決定した。その結果，既修者を含めて17名の学生が全学向け日本語コースを受講することとなり，残りの10名が初級特別日本語コースを受講することとなった。

第77期日本語研修コースの受講生もすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり，合計６名であった。このうち５名が６ヶ月の研修終了後愛知教育大学で研修を続ける教員研修生，１名が名古屋大学に進学予定の研究留学生であった。その出身国は６ヶ国であった。事前の報告から，６名中３名が日本語中級以上の既修者であることがわかったため，開講前に国費研究留学生を受け入れる名古屋大学教員に案内を出し，初級特別日本語コース受講の学内公募を実施した。その結果，３名の応募があったため，合計６名で初級特別日本語コースを開講することとした。ただし，学内公募により受講を始めた１名の学生は，学期途中で入試準備等に時間が取られるようになったため，全学向け日本語プラグラムへ移動した。

以下，初級特別日本語コースのクラス編成，内容について報告する。

２．クラス編成

授業は，第76期においては２クラス編成とし，第77期においては１クラス編成とした。専任教員２名，非常勤講師５名の計７名が担当した。

３．時間割と日程

第76期においては８月上旬まで15週間の授業を行い，夏休みを挟んで９月に修了式を実施するという日程とした。第77期においては２月上旬まで15週間の授業を行い，３月に修了式を実施するという日程とした。

授業は月曜日から金曜日まで，午前８時45分から午後２時30分まで90分授業を３コマ行った。開講式の前に到着時のオリエンテーションを行った。オリエンテーションでは，名古屋大学での日本語教育の全体像及び日本語研修コースの概要を説明し，その後，未習者には学習背景アンケート，既習者にはプレースメントテストおよびインタビュー，さらに学習背景アンケートも行った。

４．カリキュラム

カリキュラムは，これまでのように（1）主教材 A Course in Modern Japanese {Revised Edition}, Vols.1 & 2（名古屋大学日本語教育研究グループ編）を中心とする授業，(2) その他の活動 （テーマに沿って書いて話す：楽しかったこと，趣味，国の観光地，国との習慣の違い）を行った。第71期より最終週に行ってきたビデオ作成プロジェクトを2017年度も実施し「日本語研修コース紹介」を作成した。このプロジェクトは，クラスメート，日本語の教室，日本語プログラム，国際言語センター，名古屋大学など紹介したい人や場所を受講生が決定し，台本作成，練習，撮影を行うというものである。第76期，第77期においても，ドラマ仕

立てで日本での生活や寮の紹介をしたり，お勧めのレストランやお店などを紹介したりとこれまでとはひと味違った内容となった。作成したビデオは修了式当日に上映された。

終了時には，修了アンケートを実施し，第76期は10名の学生から，第77期は５名の学生から回答が得られた。

専門と日本語学習の両立についての質問に対して，第76期は「入試準備」「専門との両立」が特に後半大変で日本語学習に集中できなかったという回答が半数以上から寄せられた。一方第77期の受講生は教員研修の学生が主であったため，このような問題は提出されなかった。ここ数年，前期は受け入れ人数も多くそのほとんどが大学院入試を控えているのに対して，後期は受け入れ人数が一桁の場合も多く教員研修留学生がその大半を占めるという状況が続いている。前期にはコース途中の６，７月に入試が実施される研究科も多く，また，８，９月の入試であっても，事前に研究計画書等を準備しなければならないため，それに時間を取られる学生が多い。一方，後期は日本語学習に専念できる受講生も多い。今後もこのような傾向が続くとすれば，前期と後期のクラス編成やカリキュラムを統一している現在のシステムがいいかどうかを検討する必要もあるだろう。

また，カリキュラム，教育内容については，発表や漢字，Reading のクラスを「もう少し時間を増やしてほしい」,「作文と組み合わせた授業にしてほしい」という回答も多かった。2017年度までの授業では，作文に関しては発表原稿を書いてそれをフィードバックし，それを覚えて発表するという形でしかカリキュラムの中には組み込んでいなかったが，今後は段階的に読む，書くという力を身につける工夫も求められる。

５．まとめと問題点

2016年度の報告において，大学院入試に時間を割かなければならない受講生と，日本語の学習に専念できる受講生が一つのクラスに混在していることを課題として指摘した。その対策として，研究科での受け入れ教員と連絡を密に取り，彼らが日本語研修生からスムーズに研究科学生へと移行できる体制を構築していく必要があることも指摘した。2017年度においては，事前に受け入れ教員と連絡を密に取ることができ，その課題の軽減は図れたと考える。しかしながら，前期と後期の受講者の受け入れ人数の多寡とその背景の差に配慮したカリキュラムと内容の再検討を今後も続ける必要がある。

第36期　上級日本語特別コース（2016年10月～2017年９月）

永　澤　　済

第36期上級日本語特別コースは，「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の３つを目標として行われた。

学習者は，６カ国，７名（インドネシア：２名，インド：１名，韓国：１名，カンボジア：１名，クロアチア：１名，シンガポール：１名）であった。また，10名の教員が指導に当たった。

以下，主要なプログラムについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習（10月～４月）

『名古屋大学　日本語コース中級Ⅰ』『名古屋大学　日本語コース中級Ⅱ』『名古屋大学　日本語コース中級Ⅰ　聴解ワークシート』『名古屋大学　日本語コース中級Ⅱ　聴解ワークシート』（以上，名古屋大学日本語教育研究グループ編）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として，「プリテスト（予習のチェック）」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また，３課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては，録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話（10月～４月）

教科書の会話が大学など限られた場を想定したものであることから，社会におけるより広範な会話力（表現力，運用能力）を高めることを狙いとして，「応用会話」を行った。教材として，各種のモデル会話などを作成し，使用した。

(3) 入門講義・特殊講義（10月～７月）

日本に関する基礎知識を身に付けること，レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして，10月～２月（前期）および４月～７月（後期）の期間，それぞれ４つの分野の入門講義を14回（各90分）行った。前期は，「日本文化論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」「日本文学Ⅰ」であり，後期は，「日本文化論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」「日本文学Ⅱ」であった。学生は，前期は５科目のうち３科目以上を選択，後期は５科目のうち２科目以上を選択することとした。なお，入門講義は全学留学生が受講できるものであり，大学院研究生，短期交換留学生などとともに受講した。

(4) 作文（レポートのための基礎訓練）（１月～５月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして，「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文･レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」「論文で使われる言葉」などについて学習した。

(5) 発展読解（10月～４月）

発展読解として，「精読」（教科書の読解教材に代わるもの），「新聞読解」，「問題付き読解」（一般の文章に読解の手助けとなる問題を付したもの），「本の読解」（教員が用意したエッセイ・小説などの中から，学習者が興味のあるものを選択），「特別読解」（学習者が，新聞などから自分で記事を見つけ，授業でも教師役をする）などを行った。

(6) 上級文法・語彙（兼Ｎ１対策）（10月～４月）

上級レベルの文法・語彙の練習問題（18回分）を作成し，使用した。これは，日本語能力試験（Ｎ１）の準備を兼ねるものである。

(7) スピーチ（10月～７月）

自国の紹介，自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて，学生がスピーチを行った（１人，１回，10分程度，スピーチ後に質疑応答／各学生，年２回実施）。

(8) レポート（１月～７月）

学生各自がテーマを決め，教員の個別指導のもとでレポートを作成した。分量はＡ４，15～30枚程度である。なお，今期も,「論文」「随筆」「創作」「報告」「作文」という５つのカテゴリーの中から，学生が１つを選んで取り組むこととした。その内訳は，論文：３名，随筆：３名，創作（小説）：１名であった。成果は『2016～2017年度日本語・日本文化研修生　レポート集』(192ページ）として発行した。また，中間発表会（５月，発表：20分／質疑応答：10分)，最終発表会（７月，発表：20分／質疑応答：５分）を実施した。レポートの題目は以下の通りである。

(1) 論文

１．アダウ･ヒマリー(インド)「日本語とマラーティー語の慣用句の比較―「目」「頭」「花」を含む慣用句の分析―」
２．カン･テウォン（韓国)「天皇の生前退位と特例法について」
３．クム･カエマリー（カンボジア)「日本における同性婚―同性愛者の家族を形成する権利―」

(2) 随筆

１．クリスティーナ･ブラナ（クロアチア)「縁(ふち)を舞う存在」
２．リナ・サパリナ・ムスティカワティ（インドネシア)「蘇った記憶～石けりのたび」
３．リム･シュルイ（シンガポール)「九州を巡る旅～2013・2015・2017年～」

(3) 創作（小説）

１．アニンディタ・クスマ・アディティヤ（インドネシア)「虹色の天使」

(9) 総合演習（12月／５月～７月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして，前期と後期の両学期に総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し，学生は多様な言語活動を行った。テーマは以下の通りである。

前期：「名古屋の名物について知ろう」（１週間）
後期：「ことばと遊び」（１週間),「やきもの」（３週間),「日本人とスポーツ:心技体の世界」（１週間）

なお,「やきもの」についての総合演習では，グループに分かれて，調査・インタビュー等を行い，ジンを作成した。調査担当者，ジンのタイトルは以下の通りである。

１．クム，クリスティーナ，ヒマリー，リナ「魔法の町」
２．アニン，カン，シュルイ「断磁器～食事すら忘れるやきものの街の旅～」

(10) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～７月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして,「漢字テスト」(20回)を行った。また，漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」（４回）を実施した。

(11) その他

以上に加えて，本学の学部生向けに開講されている教養科目の１つである「留学生と日本：異文化を通した日本理解」にも参加した。

(12) アンケート

2017年７月に，学習者に対して，コースの内容などに関する詳細なアンケートを行った。以下,「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問について，アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	０人	０人	４人	３人

(13) 今後に向けて

学生は様々な課題・活動に熱心に取り組み，成果をあげた。本コース所属の学生は，コース開始時点ですでに高度な日本語運用力をもっている。その力をさらに確固たるものとすることにより，日本社会・伝統文化・歴史・文学・経済・科学技術・地域社会等について実地に学び，経験し，視野を広げてほしいと願って

いる。

そのための取り組みとして,「日本語」を標榜する本コースとしては，第一に文法・語彙力の充実を図りたい。本期，授業で扱った練習問題「上級文法・語彙」について，学生のアンケートに「例文の使い方の説明がもっとあればよかった」とのコメントがあったが，このコメントが示すように,〈知識〉を〈運用〉につなげるには，実際の用例に多くふれることが重要だと思われる。同じくアンケートに「歌の歌詞で日本語を勉強すると面白いと思う」とのコメントもあった。こうした声をいかし，多様なテキストの読解や聴解をとおして,「文法･語彙」の運用力を高め，豊かな表現力を養っていきたい。

全学向け日本語プログラム　2017年度

李　　澤　熊

全学向け日本語プログラムは，名古屋大学に在籍する留学生(大学院生，研究生など)，客員研究員，外国人教師などを対象に，日常生活や大学での研究生活に必要とされる日本語運用能力の養成を目指して開講されている。

2017年度は昨年度に引き続き，日本語プログラムを見直し，効率を図るとともに，全学の留学生を対象とする全学向け日本語講座の拡充計画を立案し，実施した。

１．2017年度の概要

１）2017年度は，前期・後期に「集中コース（IJ コース)」と「標準コース（SJ コース)」を開講し，アラカルト授業として「オンライン日本語コース」「漢字コース」「入門講義」「ビジネス日本語コース」を開講した。集中コースは，前・後期それぞれに，週20時間４レベルの７クラスを設けた。なお，集中コースはすべて午前の開講となった。

標準コースは，前･後期それぞれに，週10時間４レベルの10クラスを設けた。なお，「グローバル30コース」に対応するために，標準コースの一部（SJ101～SJ202）の開講時間帯を午前に変更した。

２）例年と同様，初級Ⅱ以上を希望する受講者を対象にクラス分けテストを実施し，日本語能力レベルに応じたクラス編成をした。なお，今年度からクラス分けテストは J-CAT（インターネット日本語能力自動判定テスト）を用いた。

３）各クラスにおいて，出席および成績の管理を行い，授業終了時に出席率および成績から合格者を発表し，合格者は次期進級する際クラス分けテストを免除している。再履修者についても同様である。

４）全学向け日本語プログラムは，基本的には単位取得をする授業ではないが，短期交換留学生に関しては，別途に単位認定基準を設け，単位認定を行った。全学向け日本語プログラムと NUPACE 日本語の成績処理方法を統一し，コース運営の効率化を図った。

５）「学生の出入りが激しい」という問題点を解消するために，登録の時に指導教員による「受講承諾書」の提出を義務化した。

６）FD 活動の一環として学生によるコース評価をレベル・科目別に行った。

２．期間と内容

１）前期開講期間：2017年４月11日（火）～７月24日（月）14週間

２）後期開講期間：2017年10月２日（月）～2018年１月29日（月）14週間

３）開講クラスと内容：

コース 科目	レベル クラス数	目　標	教　材
標準 コース (standard)	初級Ⅰ SJ101	日本語がほとんどわからない学生を対象に，日本語文法の初歩的な知識を与えるとともに日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字100字，単語数800語)	*A Course in Modern Japanese,*［*Revised edition*］*Vol.**1** & **CD***
	初級Ⅱ SJ102	初級Ⅰ修了程度のレベルの学生を対象に，さらに基礎日本語の知識を与えるとともに日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字，単語数900語)	*A Course in Modern Japanese,*［*Revised edition*］*Vol.**2**& **CD***
	初中級 SJ200	初級Ⅰ，Ⅱで学んだ文法事項の運用練習を行うとともに，中級レベルで必要となる漢字力，読解力を含め，日本語運用能力の基礎を固める。(漢字200字，単語数1000語)	国際言語センター開発教材
	中級Ⅰ SJ201	初中級修了程度のレベルの学生を対象に，日本語の文法を復習しつつ，４技能全般の運用能力を高める。 (漢字300字，単語数1200語)	『現代日本語コース中級Ⅰ』
	中級Ⅱ SJ202	中級Ⅰ修了程度のレベルの学生を対象に，日本語の文法を復習しつつ，大学での勉学に必要な日本語能力の基礎を固める。 (漢字400字，単語数2000語)	『現代日本語コース中級Ⅱ』
	中上級 SJ300	中級Ⅰ，Ⅱで学んだ学習項目を実際の場面で使えるよう運用練習を行い，上級レベルの日本語学習の基礎を固める。 (漢字500字，単語数3000語)	国際言語センター開発教材
	上級 SJ301	中上級修了程度の学生を対象に，大学での研究や勉学に必要な口頭表現，文章表現の能力を養う。 (漢字800字，単語数4000語)	国際言語センター開発教材
集中 コース (intensive)	初級Ⅰ IJ111	日本語がほとんどわからない学生を対象に，日本語文法の初歩的な知識を与えるとともに日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字，単語数800語)	*A Course in Modern Japanese,*［*Revised edition*］*Vols.**1**, **2**& **CD***
	初級Ⅱ IJ112	標準コース初級Ⅰ修了程度の学生を対象に，日本語文法の基礎を固め，日常生活だけでなく勉学に必要な基礎的日本語運用能力を養う。(漢字250字，単語数1000語)	*A Course in Modern Japanese, Vos.**2** & **CD***, 作成教材
	中級Ⅰ IJ211	集中コース初級Ⅰまたは標準コース初級Ⅱ修了程度の学生を対象に，日本語の文法を復習しつつ，４技能全般の運用能力を高める。 (漢字300字，単語数1200語)	『現代日本語コース中級Ⅰ』および国際言語センター作成教材
	中級Ⅱ IJ212	集中コース初級Ⅱまたは標準コース初中級修了程度の学生を対象に，４技能全般の運用能力を高め，研究に必要な日本語能力の基礎を固める。(漢字400字，単語数2000語)	『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』
漢字 コース (kanji)	漢字1000 KJ1000	漢字300字程度を学習した学生を対象に，日本語能力試験Ｎ３-Ｎ２程度の漢字1000字を目標に学習する。	『漢字マスター Vol.3 ２級漢字1000』
	漢字2000 KJ2000	漢字1000字程度を学習した学生を対象に，日本語能力試験Ｎ２の上からＮ１程度の漢字約2000字およびその語彙を学習する。	『日本語学習のための よく使う順 漢字2100』
入門 講義 (introductory)	次の専門分野を日本語でやさしく解説する講義形式の授業である。日本語運用能力を高めるとともに，日本理解を助ける科目である。標準コース中上級レベル以上の日本語能力が受講資格である。		
	日本文化論Ⅰ・Ⅱ JC200	Ⅰ：この講義では，日本の家族や学校をめぐる最近の問題を取りあげ，受講者の出身国の事例と比較しながら，日本の社会や文化の特徴を議論していく。取りあげるテーマは，夫婦別姓，国際結婚，いじめ，不登校，フリーターなど。 Ⅱ：日本の社会や文化の特徴をより深く理解するために，韓国を比較の対象として取りあげ，東アジアにおける「近代」(西洋文明との出会い）の意味を考える。	講読文献などは授業中に適宜指示する。

コース 科目	レベル クラス数	目　標	教　材
入門 講義 (introductory)	言語学Ⅰ・Ⅱ GL200	Ⅰ：主に現代日本語を素材として，言語学の基礎を学ぶ。取り上げるテーマは，言語学の基本的な考え方，人間の言葉の一般的特徴，言葉の意味（意味論），言葉と社会（社会言語学），世界の言語と日本語（言語類型論）である。 Ⅱ：言語学の一分野である意味論（認知意味論を含む）について学ぶ。特に，現代日本語を素材として，類義表現・多義表現などの分析方法を身につけることを目指す。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本語学Ⅰ・Ⅱ JL200	Ⅰ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ，整理・検討することによって，文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。取りあげるテーマは品詞，ボイス，テンス，人称，活用等 Ⅱ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ，整理・検討することによって，文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文学Ⅰ・Ⅱ NL200	Ⅰ・Ⅱ：日本文学史を概観した後，主に近代における日本文学（小説，随筆，短歌等）の講読を通して，表現や作品の背景を学ぶ。ジェンダーや異文化受容の視点からも日本文化を考える。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
オンライン・ 日本語コース	・中上級読解作文 OL300 ・オンライン漢字 OLkj	中級レベルを修了した学習者を対象に，400字～600字程度の文章の理解とその文章の要約や関連作文を課し，文章表現能力を養う。 初中上級レベルの学習を修了した学習者を対象とした漢字のクラスを開講している。毎週１回オフィースアワーを開設する。	Moodle 版日本語教材
ビジネス日本語 Business	ビジネス日本語 Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ BJ400	将来，日本の企業に就職を希望する人はもちろん，日本人のビジネスコミュニケーションに対する理解を深めたい留学生を対象とし，日本のビジネス・マナー及びビジネスで用いられる日本語表現を身につける。	Ⅰ；『ビジネスのための日本語・初中級』 Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ：『新装版商談のための日本語・中級』

（入門講義科目の「Ⅰ」は秋学期に，「Ⅱ」は春学期に開講する。）

３．受講生数

１）標準コース

	前期			後期	
	登録者数	修了者数		登録者数	修了者数
初級Ⅰ（２クラス）	48	36	初級Ⅰ（３クラス）	125	108
初級Ⅱ	27	26	初級Ⅱ	29	25
初中級	15	13	初中級	37	22
中級Ⅰ	29	26	中級Ⅰ	39	33
中級Ⅱ	24	21	中級Ⅱ	42	30
中上級（２クラス）	39	30	中上級	54	27
上級（２クラス）	64	26	上級（２クラス）	82	37
漢字1000	35	21	漢字1000	45	26
漢字2000	16	9	漢字2000	27	18
日本文化論	34	18	日本文化論	74	38
言語学	17	10	言語学	51	26
日本語学	23	12	日本語学	43	24
日本文学	33	15	日本文学	66	28
ビジネス日本語Ⅱ	32	17	ビジネス日本語Ⅰ	37	22
ビジネス日本語Ⅳ	24	14	ビジネス日本語Ⅲ	31	19
Online 日本語	47	25	Online 日本語	74	35
計	507	319	計	856	518

2）集中コース

	前期			後期	
	登録者数	修了者数		登録者数	修了者数
初級Ⅰ・Ⅱ（２クラス）	22	17	初級Ⅰ・Ⅱ（３クラス）	25	22
初級Ⅱ・初中級	14	11	初級Ⅱ・初中級	13	11
初中級・中級Ⅰ（２クラス）	15	13	初中級・中級Ⅰ（２クラス）	23	20
中級Ⅰ・Ⅱ（２クラス）	22	20	中級Ⅰ・Ⅱ	9	8
計	73	61	計	70	61

４．学生によるコース評価

昨年度と同様に授業改善と教授能力の向上を図るために，前期と後期に受講者を対象に，コース内容に関するアンケートを実施した。回答者数（短期交換留学生を含む）は前期と後期，それぞれ167名と200名である。

アンケートの内容はレベルによって異なるが，各レベルに共通して尋ねた質問のうち３つの項目について報告する。

質問１：勉強したことがよく理解できたと思いますか。
質問２：授業内容は自分にとって役に立ったと思いますか。

前期

	Ｑ１	Ｑ２	合計
そう思う	69	92	48%
どちらかといえば「はい」	62	47	33%
どちらとも言えない	24	17	12%
どちらかといえば「いいえ」	12	7	6%
そう思わない	0	4	1%
回答者合計	167	167	100%

後期

	Ｑ１	Ｑ２	合計
そう思う	85	123	52%
どちらかといえば「はい」	84	52	34%
どちらとも言えない	17	14	8%
どちらかといえば「いいえ」	11	8	5%
そう思わない	3	3	1%
回答者合計	200	200	100%

以上の結果から分かるように，全般的に良好な評価結果が得られた。ただ，受講者によっては「話す練習の機会を増やしてほしい」「日常生活に関わる授業内容をもっと取り上げてほしい」「発音練習などの時間があればいいと思う」というような指摘もあった。今後，このようなニーズに対応していくために，さらに工夫が必要であろう。

質問３：日本語の授業について意見やアドバイスがあったら書いてください。

この質問には様々な回答があったが，全般的に寛大な評価が多かった。しかし，中には以下のような要望も出ており，今後さらなるプログラムの改善に努める必要があると感じた。

・テストの内容を工夫してほしい。
・作文のテーマのバリエーションを増やしてほしい。
・専門的な内容も取り入れてほしい。
・日本語能力試験の対策クラスがあればいいと思う。
・普通の授業でも漢字を取り上げてほしい。

５．今後の課題

以上のように，2017年度は昨年度の実施結果を踏まえ，留学生の多様なニーズに対応するために，さらにコースの改善を図った。例えば，クラス分けテストの実施方法をインターネットによる日本語能力自動判定テスト（J-CAT）に変え，受講生への便宜を図った。しかし，ここ数年，本学では国際化戦略に伴い，留学生を対象とした様々なプロジェクト型の教育が積極的に行われており，日本語教育を担っている本センターの役割はさらに重要になることが予想される。

そこで今年度は，既存の日本語プログラムを見直し，さらに効率を図るための準備（プログラムの改編）を行った。来年度からは新体制でのコース運営となる。概要は次の通りである。

全学向け日本語プログラムは，現在，NUPACE 生，研究生，正規生を主な対象としたプログラムである

が，研究生，正規生は専門の勉強が優先になっているということもあり，受講者の半数以上が途中でドロップアウトしているのが現状である。そこで，研究生，正規生を主な対象とした週３コマのコースを開講し，大きな負担にならない程度に，できるだけコース終了時まで続けられるようなコース設計を考えている。また，日本語で研究を進めなければならない名古屋大学人文学研究科の研究生受け入れ基準が「日本語能力試験Ｎ２以上」ということを考慮し，NI，Ｎ２レベルの上級コースは設けない。但し，「総合日本語」という形で，５限，６限に上級者向けの授業は開講する予定である。なお，現在，週10コマの集中コースと週５コマの標準コースを開設しているが，NUPACE 専用のコースとして週５コマのコースのみを新設し，週10コマの集中コースは廃止する。

【全学向け日本語プログラム】

１）全学日本語コース（14週）

※週３コマ，初級～中級レベル

SJ110レベル１（３クラス）（ゼロ初級相当）
SJ120レベル２（２クラス）
SJ210レベル３（２クラス）
SJ220レベル４（２クラス）
SJ310レベル５（２クラス）
SJ320レベル６（２クラス）
SJ330レベル７（２クラス）（中級後半相当）
合計：７レベル・15クラス

２）アラカルト授業（14週）

☆漢字コース（初級～上級レベル）

初級レベル　　漢字１
初中級レベル　　漢字２
中級レベル　　漢字３
中上級レベル　　漢字４

☆入門講義（中・上級レベル）

言語学
日本語・日本教育学
日本文化論
日本文学

☆総合日本語（新設：上級レベル）

日本語能力試験Ｎ２-Ｎ１程度の日本語能力を有する学生を対象に，時事的・準学術的な抽象度の高いトピックを取り上げ，大学での研究に必要な口頭表現，文章表現の高度な能力を養う。

総合日本語１
総合日本語２
総合日本語３
総合日本語４
総合日本語５
総合日本語６
総合日本語７
総合日本語８
総合日本語

☆オンライン・日本語コース（初級～上級レベル）

オンライン漢字
中上級読解作文

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

浮　葉　正　親

学部に在籍する留学生が大学で所定の単位を取得していくためには，講義を聴く，ノートをとる，ゼミで発表する，レポート・答案を書く，ディスカッションをするなど，高度な日本語運用能力が要求される。授業ではそのための訓練を行うとともに，日本人学生や教員とのコミュニケーション能力の育成や日本社会・文化に対する理解を深めることを目的としている。

2017年言語文化科目「日本語」の科目および受講者数は以下の通りであった。

期	対象	内容	時間	担当者	受講者数
1期（1年前期）	文系	文章表現	月3限	藤森秀美	6
		口頭表現	木3限	西田瑞生	6
	理系	文章表現	火2限	俵山雄司	3
		口頭表現	木2限	西田瑞生	3
	工学（国）	口頭表現	月2限	藤森秀美	5
		文章表現	水2限	西田瑞生	6
	工学（私）	文章表現	月2限	浮葉正親	4
		口頭表現	水2限	鷲見幸美	4
2期（1年後期）	文系	文章表現	金2限	西田瑞生	5
		口頭表現	木3限	俵山雄司	5
	理系	文章表現	火2限	浮葉正親	3
		口頭表現	木2限	西田瑞生	3
	工学（国）	口頭表現	月2限	西田瑞生	6
		文章表現	水1限	西田瑞生	6
	工学（私）	文章表現	月2限	藤森秀美	4
		口頭表現	水1限	鷲見幸美	4
3期（2年前期）	文系	文章表現	火1限	浮葉正親	10
4期（2年後期）	文系	文章表現	木1限	浮葉正親	11

クラス

文系：文学部・教育学部・法学部・経済学部・情報文化学部社会システム情報科

理系：医学部・理学部・農学部・情報文化学部自然情報学科

工学（国）：工学部（国費留学生・政府派遣留学生）

工学（私）：工学部（私費留学生・日韓理工系留学生）

授業内容

1年前期

文系・文章表現

意見レポートを書きあげることを目標に，書き言葉と話し言葉，意見レポートの表現・語彙，要約，引用を学んだ。レポートの作成は①適切なテーマを選ぶ②適切な論拠に基づき本論を書く③本論から自然に導ける結論を書く④レポート全体をふまえて序論を書くという手順で行った。①～④各段階ごとに学生同士で読み合い，コメントを元に書きなおす作業を行った。

また，メールの書き方を学び，依頼，謝罪等のメールを書く練習を行った。

文系・口頭表現

大学生活，とくに，学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるために，構造的なわかりやすさということ

に注目し，いくつかのトピックを話す場合に，同じトピックのものをまとめて話すグルーピング，トピックをまとめたものを最初に話すラベリング，どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較，対照によってわかりやすく豊かにする方法も学んだ。

理系・文章表現

短い文章からはじめて徐々に長い文章を書く練習を行った後で，各自がテーマを設定し，いくつかの文章を読んでまとめる最終レポートを執筆した。最終レポートについては，テーマ設定，材料集めやアウトラインの作成などを授業中の作業や宿題によって少しずつ進めていった。また，その過程で，「協働学習」の方法を取り入れ，受講者同士でお互いが書いたものについて検討したり，コメントしたりする活動を行った。

理系・口頭表現

大学生活，とくに，学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズな口頭表現ができるようになるための練習をした。構造的なわかりやすさということに注目し，いくつかのトピックを話す場合に，同じトピックのものをまとめて話すグルーピング，トピックをまとめたものを最初に話すラベリング，どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較，対照によってわかりやすくする方法なども学んだ。

工学系（国費）・文章表現

大学生活，とくに，学会やクラスでの文章作成において必要な魅力的でしっかりした構造の文章表現ができるようになるための練習をした。いくつかのトピックを書く場合に，同じトピックのものをまとめて書くグルーピング，トピックをまとめたものを最初に書くラベリング，どの順序で書くかというオーダリングを考え，比較，対照によって文章をわかりやすく豊かにする方法も学んだ。

工学系（国費）・口頭表現

プレゼンテーションを行うことを大きな目標に，図表･データ，比較，因果関係，質疑応答の表現を学び，練習した。

まず，プレゼンにふさわしいテーマを選び，データを集め，そこからどのような結論が導けるか考えるという手順で授業を進めた。

また，スピーチ，ディスカッションを行った。終了後はふりかえりのために，教師と学生で評価表を用いて評価し，そのずれを話し合った。さまざまな講義を聞き，ノートをとる練習も行った。

工学系（私費）・文章表現

大学生活で必要な文章表現技術に関して協働活動を通して学習した。メールによる連絡・依頼文の作成，簡単な機械の使い方マニュアルなどの説明文の書き方，資料を活用した意見文などを書く練習を行った。また，レポートを作成するために必要なアウトラインの立て方，引用・要約の仕方，レジュメの作成など基本的技能を段階的に学習した。

工学系（私費）・口頭表現

１）経験を語る３分間スピーチを行い，その録音を自分で文字化・自己評価した。自らの課題を見つけ，改善するプロセスを経験するため，一人３回ずつ行った。２）スライドを活用したプレゼンテーションの実践を通して，発表及び質疑応答の仕方を学んだ。テーマ設定から評価基準の設定まで協働的に活動した。３)NHK の番組「プロフェッショナル仕事の流儀」「クローズアップ現代」を視聴し，内容をまとめて話す活動を行った。

１年後期

文系・文章表現

前期の口頭表現で学んだことを文章に活かす練習をしながら，自らの住む名古屋の中の特定の地域をフィールドワークをして広い読者に紹介するという設定で，小雑誌を作成した。どの地域を紹介するか，なにを取り上げるか，ということから，フィールドワークで得たものをどにようぬ伝えるかなどをお互いに議論しながら，クラス全員でまとまったものを作成した。

文系・口頭表現

「在宅勤務」「結婚」「学歴」をテーマとした新聞記事などを読んだ後，その内容を元にディスカッション・ディベート･プレゼンテーションを行った。そのうち，ディスカッション・ディベートについては動画を撮影し，各自で振り返りを行った。また，各活動の後には，

「役立ちそうな表現」「自分の話し方の利点･欠点」「その活動の際に大切だと思うこと」について記述させ，学期末に総合的な振り返りを行った。

理系・文章表現

実際の科学技術論文を読み，その中で使われる書式や表現を学習した。また，語彙・表現を増やす目的で学習者の関心のある書籍を多く読み，それに関するレジュメやレポート作成を実際に行った。文章の要約や引用の仕方，図表の作り方やその説明など，レポート作成のための文章を書く練習をおこなった。

理系・口頭表現

前期に引き続き，談話をわかりやすくする構造的条件を考えながら，より魅力的に話す練習をした。自らの興味のある分野について，広く，日本との関係も考えながら，自らの文化，社会を紹介することを行い，話し，ディスカッションをするという練習も行った。このときに，聞いている側は，聞いたことをもとに作文をするという練習も行った。

工学系（国費）・文章表現

前期に引き続き，文章をわかりやすくする構造的条件を考えながら，より魅力的に書く練習をした。クラスメートの興味のある分野について，プレゼンテーション（とディスカッション）を聞いて，それをもとに，自らの意見や知っていることなども加えて作文をするという練習も行った。

工学系（国費）・口頭表現

前期の文章表現で学んだ文章をわかりやすくする構造的条件も踏まえて，魅力的に話す練習をした。自らの興味のある分野をえらび，広く，日本との関係も考えながら，自らの文化，社会について，クラスメートにも興味を持ってもらえるようにプレゼンテーションすることを行い，それについて，ディスカッションをするという練習も行った。

工学系（私費）・文章表現

論証型レポートを書きあげることを目標に授業を進めた。特にパラグラフライティングに重点を置き，パラグラフ内の構成，次にパラグラフをいかにつなげるかを学んだ。

レポートの作成は①論証型レポートにふさわしいテーマを選ぶ②データに基づき本論を書く③本論から自然に導ける結論を書く④レポート全体をふまえて序論を書くという手順で行った。①～④各段階ごとに学生同士で読み合い，コメントを元に書きなおす作業を行った。

工学系（私費）・口頭表現

1）指定テーマと受講生希望のテーマで討論を行い，討論後自分の意見をまとめ，参加の仕方を振り返ることを課した。2）各自選択した新聞記事を題材に語る３分間スピーチを行い，録音を自分で文字化・自己評価した。一人２回行い，１回目の課題の克服を意識できるようにした。3）授業外で現代小説を一冊読み切り，授業で報告会を行なった。4）川柳を提示し，日本人の解釈を複数聞いて録音することを宿題とし，授業で共有した。

２年前期

文系・文章表現

日本社会・日本文化に関する文献等を読み理解を深めるとともに，レポートや卒業論文に必要な論理的な文章の書き方を学んだ。小学校での英語教育導入，大学生の就職活動をめぐる問題の中からテーマを選び，資料を読みながら，アウトラインと序文を作成した

２年後期

文系・文章表現

前期で学んだ内容をふまえ，より高度な読解力，文章表現力の向上を目指した。要約と引用の方法を中心に学び，興味のある本の内容を紹介するレポートを作成した。ここ数年話題となった新書を十数冊準備し，選んでもらった。

授業アンケートの結果

例年のように，授業終了時に行われたアンケート結果では，ほぼ全項目において非常に高い評価を得た。主な項目を下に示す。（４点満点）

・この授業はシラバス等で説明された授業目標や評価方法に沿って行われましたか（3.7）

・この授業に意欲的・自発的に取り組むことができま

したか（3.7）

・この授業で設定された学習内容を理解できましたか（3.6）

・担当教員の熱意や工夫を感じましたか（3.8）

短期留学生日本語プログラム　2017年度

石　﨑　俊　子

１．2017年度の概要

短期留学生は日本語プログラムを受講することで単位取得が可能である。2017年度においては，１日１コマの「標準日本語コース（SJ コース）」７レベル，１日２コマの「集中日本語コース（IJ コース）」４レベル，「漢字コース」２科目，「入門講義」４科目に加え，「ビジネス日本語」４科目，アカデミック日本語８科目において単位認定を行った。

このうち，標準日本語コースの初級レベル（SJ101，SJ102）と集中日本語コースの初級～初中級レベル（IJ111，IJ112）においては，総合的な日本語能力を身につけるために，週５日出席すること義務づけている。SJ101，SJ102は１日１コマ・週５コマ・全70コマのコースであり，これらのコースを修了した学生には５単位を認定している。また，IJ111，IJ112は１日２コマ・週10コマ・全140コマのコースであり，これらを修了した学生には10単位を認定している。

SJ200以上のレベル，及びIJ211以上のレベルの学生は，レベルやニーズに合わせて文法・談話，読解，聴解，会話，作文のクラスを技能別に登録することが可能である。学生は１科目から最大５科目まで履修登録することができる。また，技能習熟度に合わせて配置されたレベルよりも下のレベルのクラスを登録することも可能である。ただし，２レベルで同じ名称の科目を登録することは認めていない。またSJ コースとIJ コースの科目を両方取ることはできない。SJ コースに登録した学生はSJ コースの科目のみ，IJ コースに登録した学生はIJ コースの科目のみ履修することができる。コース修了時，SJ においては１科目１単位を，IJ コースにおいては１科目２単位を認定している。

「漢字コース」は「漢字1000」「漢字2000」を開講しそれぞれ１単位を認定している。

以上の「標準日本語コース」，「集中日本語コース（IJ コース）」，「漢字コース」の詳細に関しては全学向けプログラムの報告を参照いただきたい。

上記に加え，日本語能力試験Ｎ２，または旧日本語能力試験２旧合格者に対しては，春学期，秋学期それぞれ４科目開講している入門講義の受講も認め，１科目につき２単位を認定している。

また，グローバル30プログラムの学生を対象に開講されているビジネス日本語に加えてアカデミック日本語４科目も短期留学生が受講した場合，１科目1.5単位を認定している。

２．成績評価

昨年と同様にＳからＡの５段階評価で，出席率が80％以下の者に対しては59点以下の成績と同じくＦと記した。（表１を参照）

表１　成績認定基準

成績	成績評価（100点満点）
S	100-90
A	89-80
B	79-70
C	69-60
F	59以下

３．登録状況

表２は春学期と秋学期の標準日本語コース，表３は集中日本語コースの登録者数を示したものである。登録者数は春学期には短期留学生の72% に相当する150名中108名（異なり数）が，秋学期においては81% に相当する146名中118名（異なり数）が日本語を受講している。この割合は例年とはさほど変化がない。

又，受講者の延べ人数でみると，標準日本語コースの受講生が春学期に351名，秋学期に317名となっている。2016年度の春学期190名，秋学期240名と比較するとどちらも大幅に増えており，特に春は1.5倍も増えている。一方，集中日本語コースの受講生は春学期に90名，秋学期に71名となっている。この数は2016年度の春学期81名，秋学146名と比較すると秋学期が半分ま

でに落ち込んでいる。しかしながら2015年度の秋学期の集中コースの受講生は97名，2014年度は86名であるので2016年度が異常に多かったと言える。表４と表５から傾向としては集中コースを選択する学生が減り，標準コースを選択する受講生が増えていると言える。

４．今後の課題

現在のコースは単位取得の必要がない全学の受講生と単位認定を目的とする NUPACE の学生が同じクラスで授業を受けている。又，近年，集中コースの受講者数が減少し，標準コースを受講する学生が爆発的に増加している。これらの単位取得の有無や標準コースと集中コースのアンバランスを解消するため，2018年春から全学の日本語クラスと NUPACE の日本語のクラスを分けて，NUPACE 単独の日本語クラスを再編成する予定をしている。

表２　標準日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
SJ101	6	30
SJ102	8	8
SJ200会話１＆２	7	4
SJ200読解	5	4
SJ200聴解	6	3
SJ200文法・談話	7	3
SJ201会話１＆２	12	7
SJ201読解	12	6
SJ201聴解	12	6
SJ201文法・談話	12	8
SJ202会話１＆２	10	9
SJ202読解	11	9
SJ202聴解	12	10
SJ202文法・談話	10	9
SJ300会話１	9	7
SJ300会話２	9	8
SJ300読解	7	9
SJ300聴解	6	7
SJ300文法・談話	17	9
SJ301会話	24	14
SJ301読解	13	10
SJ301聴解	15	22
SJ301作文Ⅰ	12	9
SJ301作文Ⅱ	11	6
漢字1000	24	25
漢字2000	10	16
ビジネス１		12
ビジネス２	12	
ビジネス３		16
ビジネス４	14	
アカデミック（聴解･発表）１		0
アカデミック（聴解･発表）２	5	
アカデミック（聴解･発表）３		11
アカデミック（聴解･発表）４	9	
アカデミック（読解･作文）１		9
アカデミック（読解･作文）２	7	
アカデミック（読解･作文）３		11
アカデミック（読解･作文）４	17	
	351	317

表３　集中日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
IJ111	10	9
IJ112	3	2
IJ211会話１＆２	3	10
IJ211読解	6	10
IJ211聴解	5	10
IJ211文法・談話	4	10
IJ212会話１	13	4
IJ212会話２	13	4
IJ212読解	12	5
IJ212聴解	10	4
IJ212文法・談話	11	3
	90	71

表４　春学期のコースの人数の推移

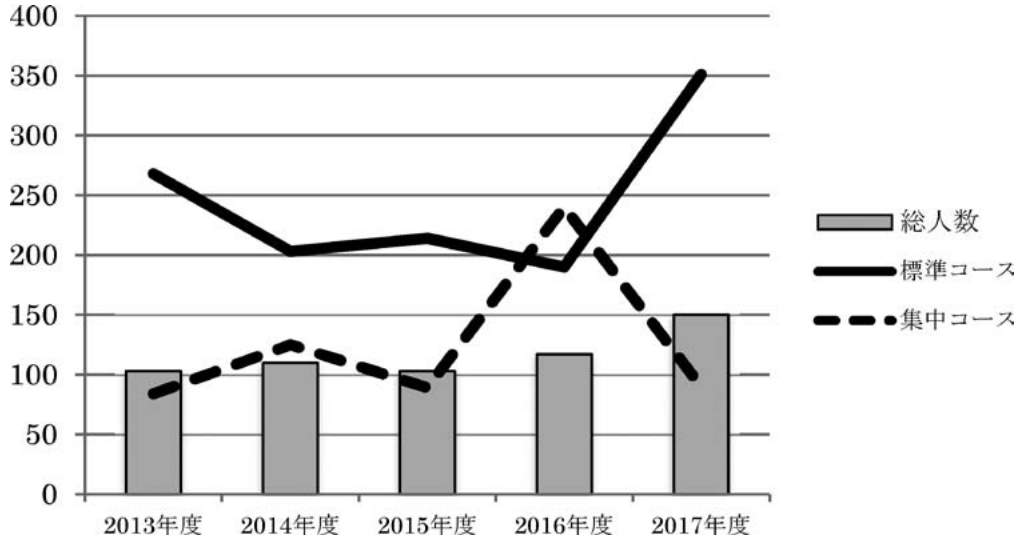
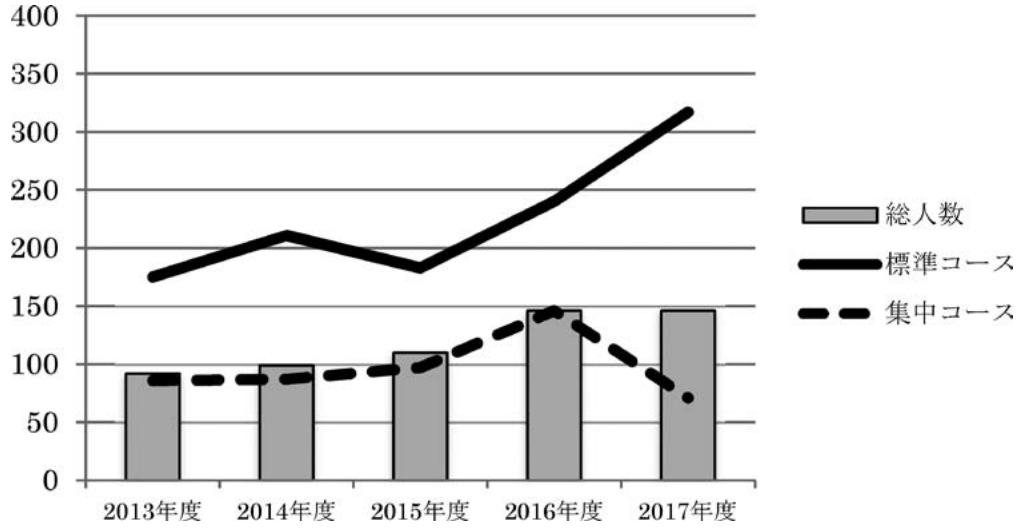


表５　秋学期のコースの人数の推移



第18期　日韓共同理工系学部留学生予備教育コース

俵　山　雄　司

１．コースの概要

このコースでは，1998年の日韓共同宣言で提言された「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」に基づき発足した「日韓共同理工系学部留学生事業」により配置された韓国人留学生に対し，学部入学前の予備教育として日本語教育などを提供している。

コースの目的は，以下の３つである。（括弧内は，目的に対応する科目名）

(1) 工学部入学後の勉学や生活に役立つ日本語運用能力を養成する（会話，聴解，作文，読解，文法，漢字・語彙，応用会話，テーマ学習）。

(2) 日本文化に対する理解を深める（日本事情，全学教育科目「留学生と日本―異文化を通しての日本理解―」）

(3) 専門教育の土台となる基礎知識を確認する（物理，化学，数学）

第18期となる今期は，平成29年９月27日から30年３月１日までの約６か月（実質18週）間，６名の学生を対象に開講された。

２．カリキュラム

(1) 科目内容

・会話：主にキャンパス内で出会う場面を想定して，特定の目的のある対面会話について，コミュニーションの摩擦や挫折を生じさせることなく行う力を養成する。週３コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ，Ⅱ』（名古屋大学出版会）使用。

・作文：「読み手」を意識して文章が書けるようになること，事実に自分の意見や感想を加えて述べることができるようになることなどを目指す。週２コマ。『Good Writing へのパスポート 読み手と構成を意識した日本語ライティング』（くろしお出版）使用。

・聴解表現：一般的な専門性の高くない話題の発表を聞いて，視覚資料があれば発表の重要なポイントが理解できる力，自分の興味のある話題について，事前に準備を行えば５分程度のプレゼンテーションをすることができる力などを養成する。週１コマ。『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解［上級］』（スリーエーネットワーク）使用。

・読解表現：新聞記事や政府の調査報告書を読み，特定のテーマについてポイントを理解し，それに基づいて論理的に議論をする力を身に付ける。週１コマ。自作教材使用。

・文法：これまでに学んだ文法事項を体系的に整理し，復習する。週１コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ，Ⅱ』（名古屋大学出版会）使用。

・漢字・語彙：大学生活で必要になる上級レベルの漢字・語彙を覚え，使うことができるようになることなどを目指す。週１コマ。『上級・超級日本語学習者のための考える漢字・語彙　上級編』（ココ出版）使用。

・応用会話：大学生活を行う上で必要なコミュニケーション能力・アカデミックリテラシーや，自身が身を置く状況下で，求められる能力がどのようなものであるのか自身で把握できるようにする力を養う。週１コマ。自作教材使用。

・テーマ学習：身近な社会問題に関する番組を見て，取り上げられている問題の主要な点を理解することができる力，また，それについて，自分の意見を述べたりクラスメートと意見交換したりすることができる力などを養成する。週１コマ。自作教材使用

・日本事情：日本で生活していく上で必要な文化的・社会的理解を深め，日本の社会や身の周りの環境に慣れる。週１コマ。自作教材使用。

・「留学生と日本」：外国人留学生と日本人学生が討論や共同作業を通じて，日本社会や日本文化に対する理解と相互の理解を深める。週１コマ。自作教材使用。

・物理・化学・数学：専門教育の土台となる基礎知識

を確認するとともに，その知識を日本語と結び付ける。各週１コマ。自作教材使用。

(2) レポート作成と発表会

２月に入ってから，各自が選んだテーマに基づき資料を収集し，報告レポートを作成した。２月22日(木)には，工学部の担当教員・日本語教育担当教員・本コースの先輩学生を招いて，レポート発表会を行った。テーマは，「AIは人間を超えられるのか　マシンラーニングの限界は？」「ビッグマック指数」「蔚山と日本との歴史的関係」「アモルファス金属」「脱北者の話」「建築の新パラダイム３Ｄプリンティング建築　建築を印刷する」であった。

(3) 評価

９月27日（水）に日本語診断テスト（今年度はウェブ上のテストである「J-CAT 日本語テスト」を使用）を行い，各科目の内容や進度を検討した。コース内の評価として，各科目において，筆記試験・口頭試験などの各種テスト，プレゼンテーション・振り返りなどの各種活動を実施した。レポート発表会後の２月下旬から３月上旬は修了試験を行った。ここでは，診断テストと同じ「J-CAT 日本語テスト」を各自で受験してもらい，スコアを提出させ，コースを通しての日本語能力の伸びを測った。

３．今期の特徴と今後の課題

先期は，科目名にとらわれることなく，各科目内で，複数の技能を統合した，より実生活での言語行動に近づけた活動の試みが増加した。今期も，その流れの一環として，「読解」を「読解表現」に改変し，類似テーマの複数の読み物から読み取った内容をまとめ，それについて自分の意見を述べる活動などを行った。ただ，アウトプットの活動として，各科目で個別にプレゼンテーションを行っていることも多かった。来期は，プレゼンテーションの実施時期のバッティングを避けたり，指導項目や評価基準を共有したりすることで，より効果的な指導につなげたい。

オンライン日本語コースの運営

石　﨑　俊　子　・　佐　藤　弘　毅

今年度のオンラインコースの履修状況は以下の通りであった。登録者数は履修登録を行った人の数を，受講者数は一度でもオンラインコースにアクセスした人の数を，修了者数は各コースの修了要件を満たした人の数である。

【オンライン読解・作文コース】

前期	登録者数：30	後期	登録者数：50
	受講者数：11		受講者数：10
	修了者数：２		修了者数：２

2017年度オンライン読解･作文コースの修了者数(14課中10課以上60％以上の成績）は前期２名，後期２名であった。

【オンライン漢字コース】

前期	登録者数：24	後期	登録者数：29
	受講者数：５		受講者数：３
	修了者数：１		修了者数：１

2017年度オンライン漢字コースの修了者数（10課中80％以上の成績）は前期１名，後期１名であった。

各期各コース共に例年並みの20数名以上の履修登録者がおり，コースに対するニーズは依然として高いことが伺える。しかし，実際にオンラインコースに一度でもアクセスした人の数（受講者数）は，履修登録者数の10%～20%程度と低い割合であった。また，最後までコースを続けて終了要件を満たした人は，受講者数の20%程度とさらに少なかった。受講者の半数以上は１課のみ受講した後，アクセスを止めてしまっていた。

以上の傾向はここ数年続いている。これは，研究などの活動を続けながら各自のペースで日本語を勉強するためにオンラインコースに受講登録したものの，実際には忙しくてなかなかコースにアクセスする時間が取れないものと推察される。一方で最後までオンラインコースを利用する受講者もわずかながら存在し，今年度は残りの30%程度の受講者はコースの半分ぐらいまでは受講を続けている。これに履修登録者数の多さも踏まえると，たとえ最後までコースを続けられなくとも受講者が自分のペースでいつでも学習できる環境が用意されていることに意味があると考えられる。今後も受講者の意見を取り入れながら，引き続きオンラインコースを運営していきたいと考えている。

資　　料

歴代国際言語センター長
平成29年度　国際言語センター専任教員
平成29年度　日本語コースの担当者
平成29年度　授業担当および学位論文審査
平成29年度　国際言語センター教員研究業績
平成29年度　国際言語センター研究会記録
平成29年度　国際言語センター全学委員会委員
国際言語センター沿革

歴代国際言語センター長

留学生センター

初代	馬越　徹	1993年４月～1995年３月
第二代	石田　眞	1995年４月～1999年３月
第三代	塚越　規弘	1999年４月～2001年３月
第四代	末松　良一	2001年４月～2005年３月
第五代	江崎　光男	2005年４月～2007年３月
第六代	石田　幸男	2007年４月～2011年３月
第七代	町田　健	2011年４月～2013年９月

国際言語センター

初　代	福田　眞人	2013年10月～2017年３月
第二代	大室　剛志	2017年４月～

平成29年度　国際言語センター専任教員

センター長　　大室　剛志（2017年４月～）

日本語・日本文化教育部門

教　授	籾山　洋介
教　授	浮葉　正親
教　授	衣川　隆生
准教授	石﨑　俊子
准教授	李　澤熊
准教授	佐藤　弘毅
准教授	俵山　雄司
准教授	永澤　済

平成29年度　日本語コースの担当者

１．日本語研修　コース

〈４月期：第76期〉

衣川　隆生　　安井　澄江
佐藤　弘毅　　松木　玲子
大羽かおり　　久野伊津子
高橋　伸子

〈10月期：第77期〉

衣川　隆生　　安井　澄江
佐藤　弘毅　　松木　玲子
大羽かおり　　久野伊津子
高橋　伸子

２．日本語・日本文化研修コース

〈2016年10月～2017年９月：第36期〉

籾山　洋介　　向井　淑子
永澤　　済　　松岡みゆき
中川　康子　　石川　公子
西田　瑞生

３．教養科目「留学生と日本ー異文化を通しての日本理解」

高木ひとみ　　和田　尚子
浮葉　正親　　富岡　良子

４．全学向け日本語コース

〈前期〉

李　　澤熊　　西田　瑞生
浮葉　正親　　安井　澄江
石﨑　俊子　　大羽かおり
籾山　洋介　　服部　　淳
佐藤　弘毅　　松木　玲子
衣川　隆生　　中川　康子
俵山　雄司　　向井　淑子
永澤　　済　　加藤　　淳
徳弘　康代　　安井　朱美
石川　公子　　田中　典子
久野伊津子　　呉　　禧受
宗林　由佳　　馬場　典子
高橋　伸子　　香川由紀子
高安　葉子　　藤森　秀美
嶽　　逸子　　蓮池いずみ
椿　由紀子　　池田菜採子

〈後期〉

李　　澤熊　　西田　瑞生
浮葉　正親　　安井　澄江
石﨑　俊子　　大羽かおり
籾山　洋介　　服部　　淳
佐藤　弘毅　　松木　玲子
衣川　隆生　　中川　康子
俵山　雄司　　向井　淑子
永澤　　済　　加藤　　淳
徳弘　康代　　安井　朱美
石川　公子　　田中　典子
久野伊津子　　呉　　禧受
宗林　由佳　　馬場　典子
高橋　伸子　　香川由紀子
高安　葉子　　藤森　秀美
嶽　　逸子　　池田菜採子
椿　由紀子

５．学部留学生を対象とする言語文化科目〈日本語〉

〈前期〉

浮葉　正親　　西田　瑞生
俵山　雄司　　藤森　秀美
鷲見　幸美

〈後期〉

浮葉　正親　　西田　瑞生
俵山　雄司　　藤森　秀美
鷲見　幸美

６．日韓理工系学部留学生日本語プログラム

〈2017年10月～2018年３月〉

俵山　雄司　　千葉　月香
李　　澤熊　　内山喜代成
梶原　彩子　　山田　裕子
木村あずさ　　安藤　郁美

平成29年度　授業担当および学位論文審査

Ⅰ．授業担当（大学院・教養教育院・NUPACE）

１．大学院

人文学研究科（国際言語文化研究科の担当科目名は省略）

籾山洋介：現代日本語学研究ａ（前期１コマ　２単位）
現代日本語学研究ｂ（後期１コマ　２単位）
日本語意味論特殊研究ａ
（前期１コマ　２単位）
日本語意味論特殊研究ｂ
（後期１コマ　２単位）

李　澤熊：日本語意味論総合演習ａ
（前期１コマ　２単位）
日本語意味論総合演習ｂ
（後期１コマ　２単位）
日本語文法論Ⅰ　（前期１コマ　２単位）
テキスト学Ⅰ　（後期１コマ　２単位）

永澤　済：日本語語彙論特殊研究ａ
（前期１コマ　２単位）
日本語語彙論特殊研究ｂ
（後期１コマ　２単位）
日本語文法論Ⅱ　（後期１コマ　２単位）

衣川隆生：応用日本語学研究Ⅰａ
（前期１コマ　２単位）
応用日本語学研究Ⅰｂ
（後期１コマ　２単位）
日本語教育方法論発展演習ａ
（前期１コマ　２単位）
日本語教育方法論発展演習ｂ
（後期１コマ　２単位）
比較社会文論オムニバスの１コマを担当
（前期１コマ　２単位）

俵山雄司：日本語談話分析総合演習ａ
（前期１コマ　２単位）
日本語談話分析総合演習ｂ
（後期１コマ　２単位）
応用日本語学研究Ⅱ（前期１コマ　２単位）

石﨑俊子：日本語教材開発総合演習ａ
（前期１コマ　２単位）
日本語教材開発総合演習ｂ
（後期１コマ　２単位）
応用日本語学研究Ⅲ（後期１コマ　２単位）

佐藤弘毅：日本語教育工学特論ａ
（前期１コマ　２単位）
日本語教育工学特論ｂ
（後期１コマ　２単位）
応用日本語学研究Ⅳ
（後期１コマ　２単位）

浮葉正親：日本事情論　（前期１コマ　２単位）
日本言語文化論（後期１コマ　２単位）

２．教養教育院

浮葉正親：基礎セミナーＡ「韓流ドラマから『パッチギ』まで―日韓比較文化論のすすめ」
（前期１コマ　２単位）

浮葉正親・高木ひとみ・和田尚子・富岡良子
：全学教養科目「留学生と日本－異文化を通しての日本理解」　（後期１コマ　２単位）

佐藤弘毅：全学教養科目「情報リテラシー（文系）」
（前期１コマ　２単位）

俵山雄司：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（前期１コマ　1.5単位）

俵山雄司：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語２」
（後期１コマ　1.5単位）

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（前期１コマ　1.5単位）

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（後期１コマ　1.5単位）

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅱ日本語１」
（前期１コマ　２単位）

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅱ日本語２」
（後期１コマ　２単位）

３．名古屋大学短期交換留学プログラム（NUPACE）

籾山洋介：入門講義「言語学１」
（秋学期１コマ　２単位）
籾山洋介：入門講義「言語学２」
（春学期１コマ　２単位）
浮葉正親：入門講義「日本文化論１」
（秋学期１コマ　２単位）
浮葉正親：入門講義「日本文化論２」
（春学期１コマ　２単位）
李　澤熊：入門講義「日本語学１」
（秋学期１コマ　２単位）
李　澤熊：入門講義「日本語学２」
（春学期１コマ　２単位）
香川由紀子：入門講義「日本文学１」
（秋学期１コマ　２単位）
香川由紀子：入門講義「日本文学２」
（春学期１コマ　２単位）

Ⅱ．学位（博士）論文審査

○衣川隆生（主査）
論文提出者：近藤行人（国際言語文化研究科）
提 出 論 文：日本とウズベキスタンを対象とした異文化間レトリック研究
―論証文における文章と文章観の多様性―

○衣川隆生（副査）
論文提出者：三上由香（国際開発研究科）
提 出 論 文：目標設定を取り入れた多読活動における英語学習者の動機づけモデルの構築

○浮葉正親（副査）
論文提出者：近藤行人（国際言語文化研究科）
提 出 論 文：日本とウズベキスタンを対象とした異文化間レトリック研究
―論証文における文章と文章観の多様性―

○佐藤弘毅（副査）
論文提出者：近藤行人（国際言語文化研究科）
提 出 論 文：日本とウズベキスタンを対象とした異文化間レトリック研究
―論証文における文章と文章観の多様性―

平成29年度　国際言語センター教員研究業績

李澤熊

論文

１）李澤熊（2018.1）「韓国語動詞만들다[mandeulda]の多義構造―『つくる』と比較して―」『語研紀要』第43巻１号，pp.107-135，愛知学院大学．

２）李澤熊（2018.3）「「とく」と「とける」の多義構造―日本語教育の観点から―」『名古屋大学人文学研究論集』第１号，pp.345-363，名古屋大学人文学研究科.

３）李澤熊（2018.3）「動詞『おさえる』の多義構造―日本語教育の観点から―」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第25号，pp.1-16，名古屋大学国際言語センター．

口頭発表

１）李澤熊（2017.8）「「腐る」と「腐敗する」の意味分析―百科事典的意味観に基づく日韓対照研究―」現代日本語学研究会（第169回），８月，於名古屋大学．

２）李澤熊（2017.9）「「腐る」と「腐敗する」の意味分析―百科事典的意味観に基づく日韓対照研究―」日本認知言語学会（第18回），９月，於大阪大学．

３）李澤熊（2017.11）「日韓対照研究―「決める」と「정하다」の意味分析」日本韓国語教育学会学術大会（第８回），11月，於愛知学院大学．

受賞

１）李澤熊（2017.5）『学会活動貢献賞』日本語教育学会

その他

１）李澤熊（2017.12）「解く」『基本動詞ハンドブック』，「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト」国立国語研究所（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）．

２）李澤熊（2017.12）「解ける」『基本動詞ハンドブック』，「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト」国立国語研究所（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）．

３）李澤熊（2018.3）「おさえる」『基本動詞ハンドブック』，「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト」国立国語研究所（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）．

石﨑俊子

論文

１）石﨑俊子（2017）「反転授業を意識した日本語CALL教材の開発―教師トレーニングの一環として」『Computer Assisted Systems for Teaching &Learning Japanese』2017, pp.276-281, CASTELJ

発表

１）石﨑俊子「反転授業を意識した日本語CALL教材の開発―教師トレーニングの一環として」CASTEL/J 2017，2017年８月６日，於早稲田大学

CALL教材開発

１）反転授業のためのビデオ（2017）
https://meidainihongo.wixsite.com/hantenvideo

浮葉正親

論文

１）浮葉正親（2017）「韓国の男巫の異性装とその歴史的背景」服部早苗・新實五穂編『アジア遊学210　歴史のなかの異性装』勉誠出版，130-144頁

２）浮葉正親（2017）「読む会に参加して　在日朝鮮人文学から磯貝治良文学へ」『架橋』第33号，在日朝鮮人作家を読む会，80-83頁

研究報告

１）浮葉正親（2017）「ソウルの村祭り紀行１　麻浦滄前洞栗島府君堂クッ」『季刊はぬるはうす』第54号，NPO法人ハヌルハウス，42-48頁

２）浮葉正親（2017）「ソウルの村祭り紀行２　江北区牛耳洞三角山都堂祭（上）」『季刊はぬるはうす』第55号，NPO法人ハヌルハウス，48-51頁

３）浮葉正親（2018）「ソウルの村祭り紀行３　江北区牛耳洞三角山都堂祭（下）」『季刊はぬるはうす』第

56号，NPO 法人ハヌルハウス，39-42頁
4）浮葉正親（2018）「「重重プロジェクト」５年間の軌跡」『JunCture 超域的日本文化研究』第９号，名古屋大学大学院人文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター，164-166頁

書評
1）浮葉正親（2017）「中村一成『思想としての朝鮮籍』（岩波書店，東京，2017年）」『韓国朝鮮の社会と文化』第16号，韓国朝鮮文化研究会，231-233頁

発表
1）浮葉正親（2017）「「創造都市晋州」の可能性と課題」（韓国語）晋州市ユネスコ創造都市推進国際学術討論会，2017年５月27日，韓国・晋州市庁市民ホール

衣川隆生
論文
1）衣川隆生・渡部裕子・NGUYEN HONG LIEN・森島聡（2017）「就業支援を目的とした日本語教育プログラムのあり方について―企業・業界と日本語教育の連携体制構築にむけて―」『2017年度日本語教育学会春季大会（早稲田大学，2017.5.20）予稿集』，pp.2-11.

佐藤弘毅
発表
1）授業における受講者の存在感促進ツールの活用にSNS 利用経験が与える影響に関する分析，日本教育工学会研究報告集，Vol.18, No.1, pp.287-294 （2018）（単著）

獲得した外部資金・研究費
研究代表
高度に情報化された教室環境における初級日本語教育用教材の要件分析，日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）（2016-2019）
研究分担
巨大壁面電子黒板と携帯端末を利用した大学講義のインタラクティブ化に関する研究，日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））（2015-2019）（研究代表者：柳沢昌義（東洋英和女学院大学））

俵山雄司
著書
1）俵山雄司（2017）「流れがスムーズになる接続詞の使い方」山内博之（監修），石黒圭（編）『現場に役立つ日本語教育研究３　わかりやすく書ける作文シラバス』くろしお出版，pp.141-157.
2）俵山雄司（2017）「「起こし文型」設計思想の検討　なぜ「終結型」はなかったか」庵功雄・石黒圭・丸山岳彦（編）『時間の流れと文章の組み立て　林言語学の再解釈』ひつじ書房，pp.115-143.

発表
1） 望月雄介・俵山雄司・村上伸次（2017）「サッカーにおける主審の認知メカニズム（J リーグ審判員と地域審判員の比較から）」日本フットボール学会15th Congress，2017年12月23日，東京学芸大学

その他
1）俵山雄司（2017）「読みやすい本　大学院生応援企画「ビブリオバトル」より　秋田喜代美著『読む心・書く心――文章の心理学入門』（北大路書房，2002年）」『日本語／日本語教育研究』８，pp.256-257.

永澤　済
論文
1）壁をこえた法律家たち―近代口語化の実践―，永澤　済，比較日本学教育研究センター研究年報14号（頁：196-202），2018年
2）留学生への作文教育―関心や能力をどう引き出すか―，永澤　済，名古屋大学日本語・日本文化論集，25巻（頁：83-103），2018年
3）判決口語化の模索―伝統と革新の間で，永澤　済，東京大学言語学論集38号（頁：本文：163-175，別表・資料：e107-117（電子版）），2017年
4）複合動詞「V おく」の用法とその衰退，永澤　済，名古屋大学日本語・日本文化論集，24巻（頁：27-44），2017年

発表
1）壁をこえた法律家たち―近代口語化の実践―，永澤　済，第13回　国際日本学コンソーシアム，2017年，口頭（一般）

籾山洋介

論文

１）籾山洋介 （2018）「『言い訳』考（その３）―『弁解』と比較して―」，『人文学研究論集』第１号，pp.325-344，名古屋大学人文学研究科

書評

１）籾山洋介（2017）“Gärdenfors, Peter, *The Geometry of Meaning: Semantics Based on Conceptual Spaces*”，『英文学研究』第94巻，pp.115-121，日本英文学会

研究発表

１）籾山洋介 （2017）「百科事典的意味と比喩」（招待講演），メタファー研究会・夏の陣2017「比喩と隠喩」，日本語用論学会メタファー研究会，2017年６月４日，於名古屋大学

２）籾山洋介 （2017）「言語理解における百科事典的意味の重要性」（招待講演），兵庫教育大学言語表現学会・平成29年度第２回研究発表会，2017年９月８日，於兵庫教育大学

その他

１）籾山洋介（2016）『基本動詞ハンドブック』WEB版

（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/），国立国語研究所・共同プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性（基本動詞ハンドブック作成チーム）」［校閲担当語「結ぶ」「おさえる」「抜ける」「合わせる」「定まる」「定める」「のびる」「のばす」「おさまる」「おさめる」「なおる」「なおす」］

平成29年度　国際言語センター研究会記録

教員による研究会

現代日本語学研究会

（関係教員：籾山洋介／李澤熊／永澤済）

「現代日本語学研究会」は，籾山洋介を世話人として，1994年３月に始まったものである。また，2003年４月より，李澤熊が事務局を担当し，研究会の運営に尽力している。研究会は2017年３月現在で166回開催されている。参加者は毎回15～30人程度である。

本研究会は現代日本語を研究対象とし（日本語と他言語との対照研究を含む），「意味論」「文法論」「語用論」等の分野で研究を行っている研究者（教員，大学院生等）の集まりである。ただし，参加者の研究の枠組みは多岐にわたり，理論志向の研究者も記述志向の研究者もいる。また，認知言語学を専攻する者も生成文法の研究者もいる。参加資格は，原則として，（近い将来）研究発表が可能な者とし，研究の水準は修士論文以上を目安としているが，学部レベルの参加者もいる。

2017年度に開催された研究会は以下の通りである。

第167回
2017年５月13日
発 表 者：滝　理江（名古屋大学大学【院】）
発表題目：助詞ナンカの意味分析―例示の意味的観点からの考察―

第168回
2017年７月８日
発 表 者：木下　りか（武庫川女子大学）
発表題目：「かもしれない」の意味拡張と主体の役割―「認識」から「表出的用法」へ―

第169回
2017年８月５日
第１発表：李　澤熊（名古屋大学）
発表題目：「腐る」と「腐敗する」の意味分析－百科事典的意味観に基づく日韓対照研究－
第２発表：滝　理江（名古屋大学大学【院】）
発表題目：例示の機能をもつ助詞ナンテの意味分析―カテゴリーの観点から―
第３発表：山本　幸一（名古屋大学）
発表題目：英語関係節の定性と概念構造
第４発表：関　ソラ（名古屋大学大学【院】）
発表題目：「まるで」と「もはや」に見られる話者の再カテゴリー化の様相
第５発表：栗木　久美（名古屋大学大学【院】）
発表題目：形容詞「高い」の意味拡張の動機づけ―フレームの観点から―
第６発表：山田　裕子（名古屋大学大学【院】）
発表題目：文末表現「～ものか」の意味の分析
第７発表：小川　朱美（名古屋大学大学【院】）
発表題目：「つかる」と「ひたる」の意味拡張からみえること―メトニミーとフレームの観点から―

第170回
2017年11月11日
発 表 者：本山まりの（名古屋大学大学【院】）
発表題目：現代日本語オノマトペの意味分析―「がらがら」「すかすか」を中心に

第171回
2017年12月23日
発 表 者：野田　大志（愛知学院大学）
発表題目：現代日本語における名詞「名」の多義性をめぐって

第172回
2018年３月17日
発 表 者：籾山　洋介（名古屋大学）
発表題目：意味の細道―（言語学を？）少し愛して，ながーく愛して―

平成29年度　国際言語センター全学委員会委員

平成29年国際機構全学委員会委員

（平成29年4月～）

委　員　会　名	国際言語センター	任期	期　　間
国際機構会議	センター長		５号委員
国際交流委員会	衣川　隆生	２年	平成28年４月１日～平成30年３月31日
国際教育運営委員会	衣川　隆生		平成29年４月１日～平成31年３月31日
交換留学実施委員会	石﨑　俊子		５号委員
全学教育企画委員会	浮葉　正親	２年	平成28年４月１日～平成30年３月31日
附属図書館商議委員会 オブザーバー	佐藤　弘毅	２年	平成28年４月１日～平成30年３月31日
情報セキュリティ組織連絡協議会	佐藤　弘毅		
全学同窓会幹事会	李　澤熊		
こすもす保育園運営協議会	石﨑　俊子	２年	平成28年４月１日～平成30年３月31日
災害対策室会議	衣川　隆生		平成25年４月１日～平成26年３月31日
教養教育院統括部 言語文化科目部会	浮葉　正親	１年	平成29年４月１日～平成30年３月31日
名古屋大学スペース・コラボレーション・システム事業委員会　全学教育棟子局運営委員会	佐藤　弘毅	１年	平成29年４月１日～平成30年３月31日

平成29年度　国際機構　国際言語センター内部委員会委員

（平成29年4月～）

委員会名	部会・WG	国際言語センター
総務委員会	特昇 WG	衣川
財務・施設委員会	経理・整備 WG	衣川・李
	情報セキュリティ WG （両センター合同）	佐藤
	安全・防災部会 （両センター合同）	衣川・永澤・石﨑
広報委員会	広報・紀要部会	浮葉・李・佐藤・俵山
	ホームページ部会	石﨑
	日本語・日本文化論集編集部会	籾山・浮葉・永澤

国際言語センター沿革

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
1977	語学センターが非常勤講師による外国人留学生のための日本語教育を開始	
1978	専任講師着任,「全学向け日本語講座」授業開始	
1979	語学センターと教養外国語系列が総合され，総合言語センター発足 総合言語センターの１部門として「日本語学科」設置 「日本語研修コース」開講	
1981	「日本語・日本文化研修コース」開講	
1984	教養部在籍留学生対象一般教育外国語科目「日本語」開講	
1991	総合言語センターが言語文化部に改組。それに伴い一般教育外国語科目「日本語」は言語文化科目「日本語」として開講される	
1993. 4	学内共同教育研究施設として,「留学生センター」設置 (「日本語・日本文化教育部門」・「指導相談部門」の２部門体制)	
	留学生センターとして，これまで通り「全学向け日本語講座」「日本語研修コース」「日本語・日本文化研修コース」言語文化科目「日本語」を開講	
1994. 4	留学生センター研修生規定が定められ,（1994.2),研修生の受け入れ開始	
1996. 4	短期留学生対象日本語授業開始	
1998. 4	インターネットによるWebCMJのオンライン開始	
1999. 4		「日本語教育メディア･システム開発部門」発足（留学生センター４部門体制となる）
8		担当助教授着任（ハリソン）
2000. 4		二人目の担当助教授着任（大野）
2001. 3	留学生センター新棟完成	
2003. 3	教授１名退任（藤原）	
4	講師１名採用（李）	
2004. 2		助教授１名転任（ハリソン）
3	助教授１名退任（神田）	
4		WebCMJ多言語版開発 オンライン読解・作文コース開始
11		助教授１名採用（石﨑）
2005. 3		助教授１名転任（大野）

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
4	日本語プログラムの再編成 １）全学日本語プログラム（集中コース，標準コース，漢字コース，入門講義，オンライン日本語コース） ２）特別日本語プログラム（初級日本語特別プログラム，上級日本語特別プログラム，学部留学生向け日本語授業，日韓理工系学部留学生プログラム）	教授１名日本語・日本文化教育部門から配置換え（村上） オンライン漢字コース開始
5	留学生センターホームページ改訂	
6	講師１名採用（佐藤）	
2006. 3	教授１名転任（尾崎）	
4	助教授１名採用（衣川）	現代日本語コース中級聴解 CD-ROM 開発
5	教授１名昇任（籾山）	
10		現代日本語コース中級聴解 Web 開発
2007. 2		現代日本語コース中級聴解 Web 課金開始
6	准教授１名昇任（李）	
2008. 3		JEMS オンライン日本語教育ポータルサイト開発
2009. 11	特任准教授１名着任（初鹿野：国際交流協推進本部）	
2010. 2	特任准教授１名着任（徳弘：国際交流協推進本部）	
2011. 3		TNe とよた日本語 e ラーニング会話編（市役所，病院，学校）完成 TNe とよた日本語 e ラーニング文字編（ひらがな，カタカナ，履歴書）完成
2012. 3		WebCMJ 多言語版完成（17言語） 「名古屋大学日本語コース中級Ⅰ＆Ⅱ」オンライン及びデジタル版の開発 TNeとよた日本語eラーニング会話編５カ国版完成 TNeとよた日本語eラーニング文字編５カ国版完成
2013. 4	教授２名昇任（浮葉，衣川）	
10	国際交流協力推進本部改編に伴い，留学生センター日本語･日本文化教育部門及び日本語教育メディア・システム開発部門は，「国際言語センター」に改組（「日本語・日本文化教育部門」･「英語教育部門」の２部門体制）。	
2014. 4	准教授１名昇任（佐藤）	
2015. 2	国際言語センターホームページ改訂	
3	教授１名定年退職（村上）	
4	准教授１名採用（俵山）	
2016. 2	G30日本語教育担当教員２名「国際教育交流センターへ配置換え」	
3	教授１名定年退職（鹿島）	
4	講師１名採用（永澤）	
2018. 1	准教授１名昇任（永澤）	
3	教授１名転任（籾山）	

編集後記

早いもので，国際言語センター年報は第５号を刊行するに至った。国立大学法人に与えられる運営費交付金が毎年削減され，本センターに割り当てられる予算もその煽りを受ける中で，考えていかなくてはならないのが「大学で日本語を教える」ことの特殊性，アイデンティティーは何かということである。その一つが，巻頭言にて大室センター長も述べられている「日頃研究に邁進し，その研究成果を留学生に還元しようと常に努力すること」にあるのではないだろうか。奇しくも，この点において第一線でご活躍されていた籾山教授が今年度末をもって転任されてしまった。残された我々にはさらなる努力が必要である。本年報によって，こうした我々の努力の一端を感じ取っていただければ幸いである。

（KS）

名古屋大学国際機構
国際言語センター年報　第５号

2018年８月31日　印刷・発行

〒464－8601　名古屋市千種区不老町
編集者　名古屋大学国際機構
　　国際言語センター
電 話〈052〉７８９－２１９８
FAX　　７８９－５１００
印刷所　株式会社　荒 川 印 刷
　　名古屋市中区千代田２－16－38
　　電話〈052〉２６２－１００６

Nagoya University Institute of International Education & Exchange

International Language Center
Annual Report　Vol. 5